

二風谷アットウシについて

71

関連シート：41、42

二風谷アットウシとは

アイヌの暮らしで培われてきた樹皮製の織物・着物をアットウシと言います。腰機こしぼたで織られる平織の反物で、アツ(オヒョウニレの樹皮)、ニペシ(シナノキの樹皮)が素材として用いられます。繊維の品質がやや劣るニカブ(ハルニレの樹皮)等が使われたという記録もあります。

平取町二風谷は、近現代に至ってもアットウシの制作に力が注がれてきた地域です。今日においても主要なアイヌ工芸品として受け継がれ、後継者の育成や素材となる樹木の植栽が行われています。

平成25年3月には「二風谷アットウシ」として北海道初の伝統的工芸品に指定され、販路拡大に向けた全国規模のPRが行われるようになりました。

近世・近代のアットウシ制作

アイヌ社会において対和人を



写真1 「二風谷アットウシ」を織っている様子。素材採取から衣服等の製品(写真2)の完成まで、熟練者であっても数ヶ月の歳月を要する。北海道の伝統的工芸品としてしっかりと価値を高め、安定的な後継者の確保へと繋げていく必要がある

主とした工芸品作りの需要が高まってくるのは、18世紀代以降とされています。

“中世までは「交易の地」であった蝦夷地は、幕藩権力によって十七世紀末時点を以てその活動を制限され、十八世紀後半には「商品生産の場」へとその経済状況が変化した”(海保1985)という人とモノの変遷が、

他者への贈与・販売・交換を意図した工芸品の制作へ繋がっていきます。

近世の交易に関する文書の中にもアットウシに関する記述(資料1)が現れるようになり、幕吏による蝦夷地調査報告にも、アットウシ制作の詳細が記録(資料2)されていきます。

こうした古記録を紐解いていくと、アットウシの産地が道内まんべんなく分布していたわけではないことが見えてきます(資料3)。また、斜里や沙流などの地域は海産物の多くない地理的環境である反面、そのことが手工芸の発達を促す側面をもっていたことが窺えます(表4)。

明治時代以降、北海道の近代化に伴う社会資本整備が急速に進められていく中であっても、沙流のアットウシ作りは途切れることなく継承されます。1878(明治11)年に平取本町を訪れたイザベラ・バードは、日常の中での生き生きとした制作工程を

資料1 宗谷場所におけるアイヌと和人との交易の交換比率(八升入りの米一俵)
寛政四(1792)年 反アツシ3枚 手幅付アツシ2枚(串原1792)
安政二(1855)年 反アツシ2枚 手幅付アツシ(平軸)1枚
(網走市史編纂委員会 1958)

資料2 幕末の蝦夷地調査にみるアットウシ制作の詳細(一部抜粋)

「アットシを製するには蝦語にヲピウといへる木の皮を剥てそれを糸となし織事なりまたツキシヤニといへる木の皮を用る事あれとも衣になしたるところ軟弱にして久しく服用するに堪ざるゆへ多くはヲピウの皮のみをもちゆる事也…此ヲピウといへる木は海辺の山にはすくなくして多く深山窮谷の中にあり夷人これを尋ね求る事もつとも艱難のわさとせり」村上島之允・間宮・村上貞助(1823)
※オピウ=オヒョウニレ(樺太東海岸の白浦方言:知里 1953)
ツキシヤニ=チキサニ(ハルニレ)

資料3 『入北記』(安政四年)の「土人交易ノ品調」「交易品直段調」等にみられるアットウシの産地

ハママシケ(浜益)、マシケ(増毛)、ルハモツベ(留萌)、ソウヤ(宗谷)、西トンナイ(樺太南西部)、シヤリ(斜里)、トカチ(十勝)、サル(沙流)、ホロベツ(幌別)、モロラン(室蘭)、ウス(有珠)、アフタ(虻田)、ヤムクシナイ(渡島東部・噴火湾沿い)
(玉蟲著・稲葉解説 1992)

観察して記録に納めています(資料5)。また、1918(大正7)年に札幌で開催された「開道五十年記念北海道博覧会」に、平取のアットウシが出品(河野選 1985)されたり、1923(大正12)年の東京勸業博覧会で二風谷のアットウシ製カロプロ(煙草用具入れ)が販売される(二風谷部落誌編纂委員会 1983)など、沙流のアットウシが広く知られるようになっていきます。

また近代は、日本国内のみならず、欧米の人類学者によるアイヌ民具調査が体系的に行われた時代でもあります。1901(明治34)年にアメリカの医師・民族学者ヒラー(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2008)が、1912(大正元)年にはロシアの民族学者ヴァシーリエフ(荻原・古原・ゴルバチョーヴァ 2007)ら、多くの研究者が来訪し沙流川流域のアットウシや機織り機を収集しています(写真2)。

二風谷のアイヌ工芸振興

近代から現代に至る中で、平取町のアイヌ工芸品の制作・販売拠点が二風谷へと定まっています。1953(昭和28)年頃には萱野茂が「茶托やお盆の製作に着手し、その後の二風谷アイヌ民芸、アイヌ観光の先鞭をつけた」(二風谷部落誌編纂委員会 1983)とされています。

同じ頃、二風谷で作られたアットウシに多くの注文が来るようになり(資料6)、昭和30年代後半以降の民芸品ブームへと繋がっていきます。旭川の民芸社によるアットウシの買いつけは、戦後間もないこの当時に商品として供給しうる産地として二風谷が広く認知されていたことを示しています。「これとい

資料4 近世古文書にみられるアットウシの産地

萱場所(現斜里町近辺)

「萱領(西は網走に接し、東は根室領メナシに至り、南はクスリの山と塚す)は、此地海産少しと云ども男夷は彫刻の細工に精妙なり。女夷またアツシを織、蝦夷全州萱場所の如き良品を産するなし。是等の産は毎く運上屋に出して交易す。…」(「第一綴 北辺要話」『加賀家文書』 齋藤 1994)

佐留場所(現日高町・平取町近辺)

「夷人業は春は海辺へ出うへ釣物をなし、夏は生海鼠を引、昆布を刈、秋に至千年川鮭漁出稼致し食糧を貯へ、余分は干立て荷物に出し、冬は山家へ帰り漁船又は網を拵へ、楯縄をなひ、女は厚しを織、キナ筵を編み、男女共春より秋迄漁業手透の節は粟、稗を作り、或は茎立の草 同根を刈取魚へ交て食糧資とす。一体夷人大勢にて産物乏しき場所故」

(「佐留場所大概書」『東蝦夷地各場所様子大概書』 北海道編 1969)

資料5 イザベラ・バードが見た平取のアットウシ(一部抜粋)

「女たちには、暇な時が少しもないようである。彼女たちは朝早く起きて、縫い物や織物をやり、樹皮を裂く。彼女たちは、自分たちや亭主にとても破れそうもないような衣服を着せてやるためばかりではなく、物々交換のためにも織らなければならない。アイヌ人が丹精こめて作った衣服を日本人の下層階級が着ているのを、いつも見かけるのである」(イザベラ著・高梨訳 2000)

資料6 二風谷のアットウシ制作・販売について(戦後)

「専業に織って販売網を広げたのは、貝沢はぎ、貝沢みさをで、昭和20年代末からは旭川市の民芸社が大量の買いつけをするようになってきた。やがて昭和30年代後半から民芸品ブームが起こり、造りさえすれば何でも売れる時代が来た。これといった現金収入がなかった村では今まで女の仕事だったシナ皮取りが男の仕事になり、糸をつむぐもの、織る者と二風谷を中心にアットウシ織が大量生産され、婦女子は夜も寝ないで働いた。二風谷の暮らしがよくなった基礎は、アットウシと婦女子の力によるといっても過言ではない」

(二風谷部落誌編纂委員会 1983)



写真2 ヴァシーリエフが1912年に平取で収集したアットウシ(現在、ロシア民族学博物館所蔵)。収集から1世紀以上を経た今日においても、色あせることのない卓越した女性の手仕事が見て取れる

った現金収入がなかった村では…」(資料6)の記述に、近代以降も大きく開発される土地柄でない二風谷のモノ作りと住民の想いを窺うことができます。

二風谷は日本列島における戦後のグローバル化の中にあっても、伝統的な手工芸を今の生活に結びつけてきた地域です。近

年は北海道の地域振興の中で再評価され、平取町の貴重な財産として発信されています。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

